

# ポジティブ感情への共感と迷惑行為抑制との関連

Empathizing with Others: Positive Affect's Role in Reducing Thoughtless Behaviors

小 池 は る か

Haruka Koike

## (要約)

本研究ではポジティブ感情への共感のしやすさ・ネガティブ感情への共感のしやすさと迷惑行為抑制との関連を検討し、ポジティブ感情への共感について、より詳細に捉えていくことを目的とした。その結果、顔見知りへの迷惑行為抑制に関しては、いずれの共感性の影響も認められなかつた。友人に関しては、ネガティブ感情に同情・共感する者は、ネガティブ感情に同情はしても共有しない者に比べ、友人に対する迷惑行為を抑制する傾向にあつた。

## (キーワード)

共感性、迷惑行為、関係性

## I 問題と目的

今後も続していく可能性のある人間関係の中での迷惑行為（周りの他者や集団、社会に対して影響を及ぼし、多くの人が不快に感じる行為）の実行は、行為者と被行為者間の関係悪化・崩壊につながりうる。相手と良好な関係を続けていくためには、受け手に迷惑と認知されうる行為を慎む必要がある。

本研究ではこのような迷惑行為の抑制要因として共感性を取り上げることとする。共感性は「他者を観察した個人に何らかの情動的・行動的反応が生じる」という個人内過程と同時に、対他者への社会的行動を動機づける側面も持っている（長谷川・下田, 2012）。共感性は、「人と人との互いに助け合い、支え合い、理解しあって気持ちよく社会生活を送るのに役立つ重要な特性」（登張, 2003）であり、「他者理解を深め、個人間の結びつきを強めたり、対人コミュニケーションを円滑にするために重要な役割」（今野・小川, 2012）を担っているため、適切とされる感情・思考・行動を促進し、不適切な感情・思考・行動を抑制すると考えられる。例えば、向社会的行動の促進 (e.g., Eisenberg, Miller, Schaller, Fabes, Fults, Shell, & Shea, 1989 ; Carlo, Eisenberg, Troyer, Switzer, & Speer, 1991), 攻撃行動の抑制 (e.g., Zillmann, 1988 ; Richardson, Hammock, Smith, Gardner, & Singo, 1992) 等である。

ところが、共感性が部分的に予測通りの効果をもたらさないケースもある。例えば、中学生の共感性（下位因子として「共感的関心」「個人的苦痛」「ファンタジー」「気持ちの想像」）及びソーシャルサポートとストレス反応との関連を検討した長谷川・下田（2012）では、共感性の一側面である共感的関心と不安の間に弱い正の相関を見出している。また、女子に限っては、個人的苦痛と怒り、ファンタジーと不安、気持ちの想像と不安に弱い正の相関が確認された。行動面への影響に関しても、一見常識的ではない結果がみられている。大学生の見守り行動を検討した永井（2012）では、「疲れている友人をそっとしておく」等の行動が多い者は、共感性の一側面である「他者指向的反応」「想像性」が低かった。

攻撃行動について検討した Richardson, Hammock, Smith, Gardner, & Sugino (1994) によると、身体的攻撃を行いやすいのは視点取得得点の低い者だが、間接的攻撃については視点取得得点の低い者より高い者の方が実行することが示されている。また、共感性とサイコパシー傾向の関連について検討した大庭・西松・大平（2013）では、衝動性や社会的逸脱等の行動的側面を測定する尺度の得点が高い者は、低い者に比べ、個人的苦痛得点が高いことが示されており、他者の苦痛に敏感過ぎても攻撃行動に結びつくことを示唆している。

迷惑行為に関しても、共感性と迷惑行為との関連を検討した一連の研究において、共感性による迷惑行為の抑制効果は認められはしたもの、それは部分的なものであった（小池・吉田、2005, 2007, 2011）。迷惑行為研究以外の先行研究もあわせて考えると、経験的には、適切とされる感情・思考・行動を促進し、不適切な感情・思考・行動を抑制すると考えらるがちの共感性の影響力は、従来考えられているほど高くない。

その一方、櫻井・葉山・鈴木・倉住・萩原・鈴木・大内・及川（2011）は、これまでの共感性研究が、他者のネガティブ感情（苦しみや不幸）への共感を中心に検討してきており、他者のポジティブ感情（嬉しさや喜び）への共感を軽視してきたと指摘した。先行研究を確認しても、幼児についてはポジティブな感情に対する共感性を検討しているものが多くある（田中・岩立、2006）ものの、青年期以降で検討したものは数少ない。その数少ない研究の1つである櫻井他（2011）では、ポジティブ感情への共感と、向社会的行動・攻撃行動との関連の検討がなされ、有意な相関を見出している。つまり、これまでの研究において共感性の影響が低かった原因是、共感性の一部しか測定していなかったためで、測定してこなかった側面こそが実は諸行動を規定していたという可能性が考えられる。本研究ではこの点に着目し、ネガティブ感情への共感とともに、ポジティブ感情への共感を扱う。具体的には、ポジティブ感情への共感のしやすさ・ネガティブ感情への共感のしやすさと迷惑行為抑制との関連を検討し、ポジティブ感情への共感について、より詳細に捉えていくことを目的とする。

## II 方法

**調査対象者** 短期大学生 234 名（男性 15 名、女性 219 名）。調査は心理学関連の授業を受講する学生を対象に、複数の教室で実施。平均年齢は、19.29 歳。

**質問紙** (1) **共感的的感情反応尺度** 櫻井他（2011）の尺度を使用した。「ポジティブな感情への好感・共有」因子（以下、ポジ好感・共有）、「ネガティブな感情の共有」因子（以下、ネガ共有）、「ネガティブな感情への同情」因子（以下、ネガ同情）から成る（Table1～3）。計 20 項目。回答形式は、「まったく当てはまらない」～「とても当てはまる」の 5 件法。

(2) **対人的迷惑行為尺度** 小池・吉田（2005）を使用する。「同性の親しい友人に対して行為をするか」及び「同性の顔見知りに対して行為をするか」について、回答を求めた。質問項目は「相手の意見を否定する」「相手に自分の価値観を押しつけてしまう」等、計 48 項目。回答形式は、「全くしない」～「ショッちゅうする」の 5 件法。

**手続き** 提示順の影響をなくすため、質問紙によって提示順を変え、カウンターバランスを行なった。

Table1 ポジティブな感情への好感・共有因子項目

- 
- ① 楽しそうにがんばっている人を見ると、応援したい気持ちになる  
 ② 成功して喜んでいる人を見ると、相手をほめたくなる  
 ③ 相手が喜んでいると、自分も嬉しくなる  
 ④ 相手がとても幸せな体験をしたことを知ったら、今まで幸せ気分になる  
 ⑤ 成功して嬉しそうな人を見ると、祝いたい気持ちになる  
 ⑥ 喜んでいる人を見ていても、その人と同じような気持ちにはならない (R)  
 ⑦ 嬉しそうな人を見ると、暖かい気持ちになる  
 ⑧ 人が幸せそうにしている光景を見ると、暖かい気持ちになる  
 ⑨ 人が嬉しそうにしているのを見ただけで、自分も嬉しくなる  
 ⑩ まわりの人が楽しそうだと、自分で楽しくなってくる
- 

Table2 ネガティブな感情の共有因子項目

- 
- ① つらそうにしている人といふと、自分もその人と同じようにつらくなる  
 ② 相手が何かに苦しんでいると、自分もその苦しさを感じるほうだ  
 ③ 相手が不安を感じていると、自分も同じ気持ちになる  
 ④ 相手が何かを怖がっていると、自分も同じ気持ちになる  
 ⑤ 悲しんでいる人と一緒にいると、その人の悲しみが自分のことのように感じる
- 

Table3 ネガティブな感情への同情因子項目

- 
- ① 人が冷たくされているのを見ると、かわいそうになる  
 ② 苦しんでいる人を見ると、ふびんだと思う  
 ③ 災害にあって困っている人を見ると、同情の気持ちがわいてくる  
 ④ 困っている人がいると、かわいそうだと思う  
 ⑤ 人が悲しんでいると、かわいそうだと思う
- 

### III 結果

**尺度構成** 共感的的感情反応尺度・対人的迷惑行為尺度について、先行研究に従い、項目の得点を合計して尺度得点とした。

**共感性が迷惑行為抑制に与える影響の検討** 忽略行為抑制に影響を与える要因を検討するため、関係性別にポジ好感・共有（2：高・低）×ネガ共有（2：高・低）×ネガ同情（2：高・低）の3元配置の分散分析を行なった（Table2）。その結果、顔見知りに関しては、主効果・交互作用ともに認められなかった。友人に関しては、ネガ共有×ネガ同情の交互作用( $F(1,226)=4.17, p<.05$ )が見出された。単純主効果の検定を行なったところ、ネガ同情高群において、ネガ共有高群・低群間に有意傾向がみられた( $F(1,230)=3.50, p<.10$  ; Figure1)。すなわち、ネガティブ感情に同情・共感する者は、ネガティブ感情に同情しても共有しない者に比べ、友人に対する迷惑行為を抑制する傾向にあった。友人に対する迷惑行為抑制

には、「かわいそう」と同情するだけでなく、友人と同じネガティブ感情を持つことが重要であることが示唆された。

Table4 各共感性高群・低群ごとの記述統計

	ポジ好感・共有		ネガ共有		ネガ同情	
	高群		低群		高群	
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)
迷惑行為実行						
友人	48.86	(1.23)	51.04	(1.28)	49.81	(1.26)
顔見知り	38.65	(1.14)	41.02	(1.18)	40.12	(1.16)
					39.55	(1.16)
					39.70	(1.15)
					39.97	(1.17)

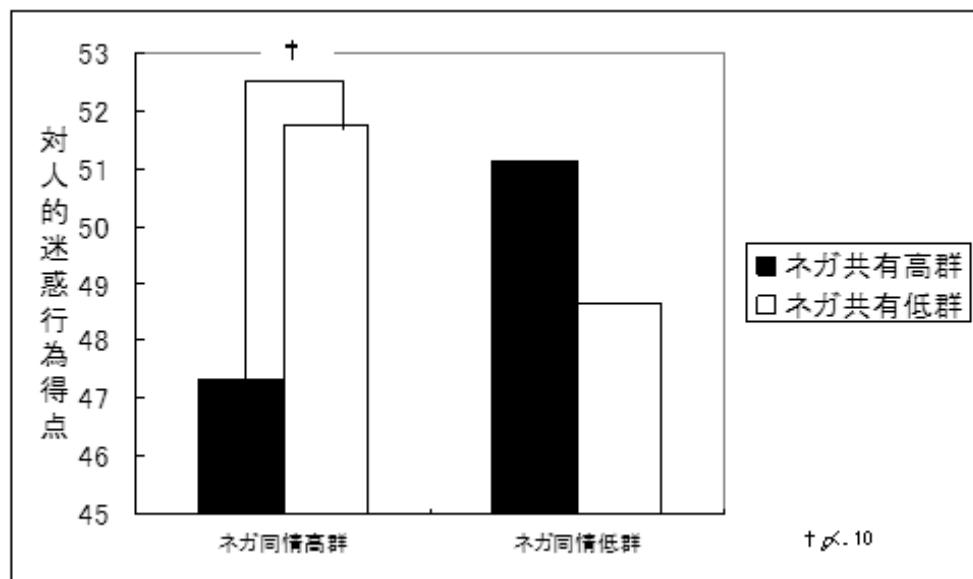


Figure1 ネガ同情群・ネガ共有群別の対人的迷惑行為得点（友人）

#### IV 考察

本研究において、ポジティブ感情への共感のしやすさの影響はみられなかった。影響がみられなかつた理由として、従属変数である迷惑行為の性質が関係している可能性が考えられる。

第一の可能性として、ポジティブ感情への共感が影響しやすい行動と、ネガティブ感情への共感が影響しやすい行動とが存在していると考えられる。例えば、「人が幸せそうにしている光景を見ると、暖かい気持ち」に持ちやすい者が、他者のために向社会的行動を起こしやすいということは容易に想像できる。しかし、「つい余計なことを言って、相手を傷つけてしまう」といった迷惑行為の抑制については、どちらかと言うと、「つらそうにしている人」といふと、自分もその人と同じようにつらくなる」といった項目に代表されるネガティブ感情への共感の影響力の方が強いかもしれない。実際に、本研究では、ネガティブ感情への共感の影響のみがみられている。

第二の可能性として、迷惑行為が、状況によって迷惑と認知されるかどうか左右される行為であることが考えられる。迷惑行為に関しては、先行研究においても、「特定の状況において共感性の高い者は迷惑認知・迷惑行為抑制をする」「状況要因の影響を受けて共感し迷惑認知・迷惑行為抑制をする」等、

状況要因と迷惑認知・迷惑行為実行との関連に、共感性が絡んでくるという結果が示されている（小池・吉田, 2005, 2007, 2011, 2012）。本研究において、友人に対しての行動のみに共感性の影響がみられたことも、その証左であると思われる。Koike(2004)では、受け手の対人的迷惑認知と行為者との関係性を検討した結果、友人からの行為よりも、顔見知りからの行為をより迷惑だと認知していることが明らかになっている。つまり、友人との間では迷惑でない行為であっても、顔見知りに対しては迷惑とされる行為であるのかもしれない。本研究の結果とあわせて考えると、同じ行為であっても顔見知りからの行為は迷惑と認知されやすいため、結果として多くの者が顔見知りに対する行為を抑制する。一方、「内」と「外」という日本人にみられる考え方（土居, 1971）からすると、本研究における仲の良い友人は「内」にあたり、お互いに顔は知っているがあまり親しく話したことのない顔見知りは「外」にあたると考えられる。「内」である身内や仲間内では、「甘え」から遠慮のないわがままな行動がみられやすいことが指摘されており、そのような関係性の中では、本人の性格特性が最終的な行動選択に影響する可能性が示唆される。迷惑行為は、先行研究で検討されたような善悪のはつきりした行動ではなく、認知もしくは実行・抑制の判断の際にはより複雑なプロセスを経るため、今後は状況変数等を考慮しながら、検討を続けていく必要があると思われる。

## 引用文献

- Carlo, G., Eisenberg, N., Troyer, D., Switzer, G., & Speer, A.L. (1991). The altruistic personality : In what contexts is it apparent? *Journal of Personality & Social Psychology*, 61, 450–458.
- Davis, M. H. (1994). *Empathy: A social psychological approach*. Boulder: Westview Press. (デイヴィス, M. H. 菊池章夫(訳) (1999). 共感の社会心理学 川島書店)
- 土井健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂
- Eisenberg, N., Miller, P.A., Schaller, M., Fabes, R.A., Fults, J., Shell, R., & Shea, C.L. (1989). The role of sympathy and altruistic personality traits in helping: A reexamination. *Journal of Personality*, 57, 41–67.
- 長谷川真穂・下田芳幸 (2012) . 中学生における友人間のソーシャルサポートの互恵性と共感性およびストレス反応との関連について 富山大学人間科学部紀要, 6, 211–220.
- Koike, H. (2004). Relations to empathy and perception of interpersonal annoyance from an acquaintance or a friend. Poster presented at the 28th International Congress of Psychology, Beijing, China.
- 小池はるか・吉田俊和 (2005). 対人的迷惑行為実行頻度と共感性との関連—受け手との関係性についての検討— 東海心理学研究, 1, 3-12.
- 小池はるか・吉田俊和 (2007). 共感性と対人的迷惑認知、迷惑認知の根拠との関連—行為者との関係性による違いの検討— パーソナリティ研究, 15, 266–275.
- 小池はるか・吉田俊和 (2011). 共感性・社会考慮が公共の場における迷惑行為抑制に与える影響 高田短期大学紀要, 29, 1-6.
- 小池はるか・吉田俊和 (2012). 共感性・社会考慮が公共の場における迷惑認知に与える影響 高田短期大学紀要, 30, 1-9.

- ・今野仁博・小川俊樹 (2012). 認知的共感性と成人愛着の関連について—愛着回避に着目して— 筑波大学心理學研究, 43, 97-107.
- ・永井暁行 (2012). 大学生の友人関係における見守り行動の検討—愛他行動および共感性との分析を通じて— 日本心理学会第 76 回大会発表論文集.
- ・大庭丈幸・西松能子・大平英樹 (2013). サイコパシー特性と多次元的共感性 人間環境学研究, 11, 13-18.
- ・Richardson, D.R., Hammock, G.S., Smith, S.M., Gardner, W., & Singo, M. (1992). Empathy as a cognitive inhibitor of impulsive aggression. Unpublished manuscript (Davis, 1994 の引用による)
- ・Richardson, D.R., Hammock, G.S., Smith, S.M., Gardner, W., & Singo, M. (1994). Empathy as a cognitive inhibitor of interpersonal aggression. *Aggressive behavior*, 20, 275-289.
- ・櫻井茂男・葉山大地・鈴木高志・倉住友恵・萩原俊彦・鈴木みゆき・大内晶子・及川千都子 (2011) . 他者のポジティブ感情への共感的感情反応と向社会的行動、攻撃行動との関係 心理学研究, 82, 123-131.
- ・田中あかり・岩立京子 (2006). 母親の幼児に対する「言葉かけ」が幼児の共感性に及ぼす影響—ポジティブ感情の共感に注目して— 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 57, 63-70.
- ・登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達—多次元的視点による検討 発達心理学研究, 14, 138-148.
- ・Zillmann, D. (1988). Cognition-excitation interdependent in aggressive behavior. *Aggressive Behavior*, 14, 51-64.